誘惑の密酒に酔いしれて、
今宵は淫らな夢に耽る
小狐丸×三日月宗近
R18

愛燐

杜若きいこ

大丈夫ですか？
あぁ…
そなたは まだまだ余裕のようだな
汗もそんなに かいておらぬではないか
乱れる三日月を 見ているだけで 十分です
小狐…
もう少し…
その、
いけませぬ

理性じゃ小狐丸理性じゃ小狐丸理性じゃ小狐丸

小狐丸とこうするのは気持ちが良い

気が触れそうなほどの快楽を与えてくれる

丁寧に扱ってくれるのはわかるが

もっと…

もっと獣のような獰猛さで…

はッ…！

なんとはしたない事を

これでは、物足りぬと言っているようなものではないか

がばっ

いち…
そなたは
俺に甘すぎる
寝てしまえば
この疼きもおさまるだろう

三日月…
三日月

こちらへ三日月…

…小狐丸？いかがした

んッ

突然何じゃ

ぬっ。

こぎつ…ふあッ

あぁ…激しい

しゅっ

じゅぷ

ぼっ

ぼっ

んあっ

小狐…

——違うッ?!

漆黒の髪…

…誰じゃ

小狐丸ですよ
三日月

嘘を申せ！

小狐丸は
白くて綺麗で…

まぁ
小狐丸の「影」
ですがね

三日月
貴方の望みを
叶えに来たのです

激しくされたい
のでしょう?

何ッ、を

彼奴のぬるま湯の
ような愛撫では
物足りぬと…

ちゅ…

——!!

はな、せッ！

くにっ

ここをもっと
こう摘んで

苛めて欲しかった
のでしょう？

ぎゅっ

痛ッ

ちが…う

ん

ほぁ

嫌…だ

ちっ

ぴっ

ほら
ここは正直ですね

ほっ

ほう

うッ…

ふッ

これは一体どういう事じゃ！

おや、遅かったではないか
何です三日月そんなにはしたなく蜜を垂らして！
小狐…？
ぽー
大事な三日月がお前では満足できぬと嘆いておいでだ
のう？三日月
そ、そうじゃ…
っ…
俺はもっと、もっと
ぽーん
小狐丸とこういう事がしたいのだッ

よいか、小狐

俺は女子のように細くもないし

日々鍛錬しておるから体も丈夫だ

ぐいっ

気遣ってくれるのはわかるが…

もっと酷く抱いて欲しい時もあるッ

三日月…

浅ましく思うか？

俺だってお前を感じさせたい

もっと深く求められたいのじゃ

ならばもう遠慮はせぬぞ？

三日月…
んん…ッ
これはそなたが望んだことじゃ
や…あ
ほらほら
口元がお留守になっていますよ
ん…
あ
んむッ
はぁ
はぁ
ちゅぱ
いつもよりいめで付けが良締すねが
三日月がこんなにいやらしいなんて

ああっ
んあ
も…だめッ
!!

…夢？
はぁ
はぁ
ひどく淫らな夢を見てしまった
ドキ♡
ドキ♡
ドキ♡
思いが募り過ぎるのも心臓に悪いのだな
そうか…俺が一人で乱れ過ぎぬように
手加減してくれていたのだな…小狐丸…
俺の状態まで気遣っての事なのに俺は…
なんと欲深いのだ
ん…三日月？
なんじゃ？
何でもない
健康第一だな
好きだ小狐丸
可愛い…

其処は淫らな夢の果て

是空

――――　眠れぬ。

褥の上で何度目かの寝返りを打ち、瞼を持ち上げた小狐丸は諦めと苛立ちを込めた溜息をつき、ゆっくりと上半身を起こす。

そろそろ子の刻を過ぎる頃だろうか。

陽の高い時間帯は、少々、賑やか過ぎる屋敷内もしんと静まり返り、起きている者は殆ど居ない。

普段であれば、この静寂を心地いいと捉え、愛でることができるのだが、今はその余裕すらない。

一旦、気分を切り替えるために外の空気を吸うか、気の知れた者と会話をすべきだと考えるのだが、部屋を出ることが億劫であり、起こすことも躊躇われて。

人間を模すとは時に面倒だと頭をかきつつ、胡坐をかく。

日中、いつものように戦場に足を運んだ。

鍛練を積んでいる身ではあるが、意識的に心身を躍動させ、討伐に励めば、肉の器は疲労を訴えてくる。

肉体そのものが感じた疲れであれば、解消するのは容易だ。

風呂に入って汗を流し、早めに横になればいいのだから。

しかし、心が感じた圧倒的な熱情が絡み、感覚に作用している場合は、この限りではなく、厄介なことになることも少なくない。

戦場で感じる興奮もその一つに分類できるだろう。

一瞬の油断も、際も許されない環境で、生死をかけて戦う。

この時、内から湧き出る興奮は、その場で制御することができても、一定量を超えてしまえば、様々な欲に変じ、徐々に表面化する。

今、こうして眠れぬ時を過ごしているのも、変じ、燻る欲が影響を及ぼしているに違いない。

それを証明するように、性欲を帯びた蟠りの欠片を感じ取れば、股間の中心にある男根は主張を強め、下着を押し上げるように硬度を増していく。

できれば、見て見ぬ振りをしたまま眠ってしまいたかったと、忌々しい気持ちを発散するために行儀悪く舌打ちすれば、あとは深い溜息しか出てこない。

普段、往なしようのない欲情に身を焦がされれば、恋仲にある三日月宗近の部屋の訪れ、同衾するのだが、生憎、彼は長期の遠征に出ており不在。

一人で慰めることへの嫌悪感と虚しさを拭うことはできないが、悶々とした気持ちを抱えたまま朝を迎えれば、与えられる任務に差し支えることは間違いないだろう。

主である審神者に迷惑や心配をかける訳にはいかないと、覚悟を決めて夜着としている小袖の裾を乱せば、下着の上には先走りによって作られた染みが浮かんでいる。

「……っ……」

抗いようのない現状から生み出される確かな羞恥心。

異変を直視してしまったことを後悔しつつ視線を外し、これは処理だと言い聞かせながら股間に手を伸ばす。

恐る恐る指先に力を込め、撫でれば、従順な反応を見せる男根はどんどんと硬くなり、更なる刺激を欲して。

この先は直接、触れた方が早いと判断し、寛がせた下肢から欲の塊を取り出せば、先端の窪みからは透明な体液が溢れ、裏筋に沿って流れ出す。

「……、は……っ……」

ぬめりを借り、幹の表面をなぞれば、湿り気を帯びる呼気。

払拭し難い恥ずかしさと漏れてしまいそうになる声を堪えようと奥歯を噛み、思い切って利き手の掌で男根を包めば、箍の外れた熱は解放を求め、一点に集中する。

「……くっ、……はぁ……」

腰に広がる甘い痺れに促され、根元から先端に向かって手を動かせば、粘着質な水音が容赦なく鼓膜に直撃する。

対極にある理性と本能の軋轢を感じつつ、顔を覗かせた淫らな欲望を優先すれば、否応なしに速まる鼓動。

これに乗じて渇く喉を嚥下した唾液で潤し、もう一方の手で双袋をやんわりと揉んでやれば、育つ欲の塊が力強く脈打つ。

だが、欲している快感を生み出す決定的な刺激にはほど遠く、湧き立つ熱は引く気配を見せず、膨れ上がるばかりで。

どうしたものかと瞼をきつく瞑り、間隔の短い呼吸を繰り返せば、脳裏には褥の上で感じ入った表情を浮かべ、乱れる三日月宗近の姿が鮮明に再生され、増幅した快感によって腰が大きく揺れる。

宵闇に映える吸い付きのいい白くなめらかな肌。

三日月を浮かべた紺藍の瞳を潤ませ、濡れた唇を震わせながら口にされる懇願。

見つめ合い、たっぷりと思いを込めた言葉を囁けば、穿つ体内の柔らかな肉が絡みつき、欲の全てを呑み込まれて。

これが扇情的な妄想であると理解しながらも、貪るように快感を堪能し、前屈みの格好となれば、噛み締めることが難しくなった唇から荒々しい呼気だけが吐き出される。

「……はっ、……はぁ……は……」

あと少しで迎えることになる絶頂。

その手前で手淫を止め、今度は両手を使って幹を包み込む。

内壁が生み出す締め付けには及ばないものの、強弱をつけて握り、根元から扱けば、想像以上の気持ちよさが全身に波及し、瞼の裏には閃光が散る。

今、目の前に三日月が居れば、容赦ない腰つきで内壁を抉じ開け、呼吸を奪うような深い口付けを交わすのだろう。

そのまま舌を絡め、穿てば、振り落とされないようにと首に回される腕に力がこもり、口内にはあえかな声が響く。

この瞬間、満たされることとなる絶対的な征服欲が今は恋しい。
心の中で彼の名を呼び、先端を親指の腹で撫でながら、一心不乱に手を上下させれば、とうとうその時を迎える。
「……くっ、……はぁ……っ……」
内腿に緊張が走り、上半身が大袈裟に揺れれば、白濁が勢いよく放出され、褥を汚さぬようにと覆った利き手の掌を濡らす。
しかし、逞しい妄想によって生み出された快楽は、一度、熱を吐き出しただけでは治まらず、もっとと強請ってきて。
噴き出した汗によって首筋に張り付く髪に構う余裕すらなく、きつく唇を噛み、乱暴な手つきで男根を愛でれば、二度目の頂はあっという間に迫ってくる。
「……っ……う、は……っ……」
目の前にある快感だけを追い求める獣となり、手淫に合わせて腹から腰を震わせれば、勢いを失った吐精によって流れ出た白濁が、幹の根元と陰毛を濡らす。
その刹那、生み出されるのは圧倒的な解放感と脱力感。
そして、妄想の中で犯してしまった三日月に対する罪悪感で。
剥き出しになった本能に抗うことは困難であると理解しながらも、後味の悪い処理の仕方をしてしまった後悔に苛まれながら、力が抜けた身体を褥に預ける。
「……は、……」
吐き出すことを意図し、深呼吸をすれば冷静さを取り戻す思考。
肌を濡らす汗と掌にこびりついたままの体液が何とも心地悪いが、今更、立ち上がる気力も湧いてこない。
投げやりではあるが、明日、目覚めてから湯を浴び、敷布を洗えばいいと言い聞かせ、そのまま手を拭って、下着を戻す。
「……三日月」
熱っぽさは引いたものの、欲の残り香を感じさせる声で愛しき言葉を口にすれば、萎えかけていたはずの男根は反応し、性感を煽るように芯を取り戻す。
現実であろうと、妄想であろうと、彼を前にすれば、本能のままに突き動かされるのは事実。
だが、その衝動すら欲の一部でしかなく、心の奥底に沈めたままの歪んだ願望が存在することを否定できない。
いつの頃からか、三日月宗近を構成する全てを支配したいと思うようになった。
その身を、その心を我が物にし、意のままに動かしたい、と。
これが独占欲から派生した思いであると気付いた時、自嘲することしかできず、無き物として扱った。
しかし、悪しきものであると分類した思いは完全に姿を消した訳ではなく、ちょっとした綻びで溢れ出し、誘惑してくると知ってからは、一人で慰めることを避け、同衾する時も常に自制と加減を心掛けていたのだ。
だが、未だに主張を止めない欲の塊は、性の本能を剥き出しにせよと語りかけ、より淫らな妄想へと誘おうとしていて。
彼が戻った時、普段通りに振る舞えるだろうかと考えつつ、長い息を吐き出せば、何もかもを奪う眠気が全身に広がり、一瞬にして意識は途切れてしまった。

◇◆◇

「……」

違和感を覚え、持ち上げた重たい瞼。

何度か瞬き、意識が急浮上すれば、上半身は勢いよく起き上がる。

眠りについたのは、確かに夜だった。

しかし、障子越しに感じる日差しは橙と朱を混ぜ合わせた夕陽の赤であり、時間が逆方向に進んでいるような感覚を齎して。

得も言われぬ恐怖が背を這っていき、否応なしに鼓動が速まれば、冷たい汗が手に滲む。

まずは現状を確認すべきだと告げる理性。

落ち着きを取り戻すことを意図し、深く息を吐き出してから周囲を探れば、全くと言っていい程、他の者の気配を感じられない。

これは現実世界では絶対にありえないこと。

だとすれば、これは夢であると結論づけ、急いで立ち上がる。

「……夢にしてはよくできている」

障子戸を開け、廊下に出れば、普段、目にしている庭園と遜色ない光景が広がるのだが、燃える太陽は毒々しい日差しを放ち、現実味はどこか乏しい。

どんな方法を講じれば、目を覚ますことができるだろうかと考えつつ、ゆっくりと歩き出せば、微かな声が鼓膜を震わせ、思わず足が止まる。

そのまま耳を澄まし、場所の特定を試みれば、そこは足しげく通う三日月宗近に与えられている私室で。

まさかと思いつつ、嫌な予感に急かされ、彼の部屋の前に立てば、蕩けた甘い音色が漏れ出しており、心臓が痛むほどの鼓動を打つ。

聴覚のみで得た情報ではあるが、一枚、隔てた先で何が行われているかなど容易に察しがつく。

しかし、それが事実であるかどうかは、実際に確かめてみなければ解らないのだが、身体は緊張しており、思うように動かなくて。

これは単なる夢だと怖気づきそうになる心を叱咤し、勢いをつけて目の前の戸を開ければ、予想し得なかった情景があり、言葉を失ってしまう。

「……っ……」

「……遅かったではないか」

室内の伸びる影の先。

そこには、こちらと同じ顔と声を持つ黒髪の男が褥の上に座っており、腕の中には三日月の姿がある。

乱された着衣から覗く白い肌に覆われた艶めかしい四肢。

男に背を預け、息を弾ませる表情はすっかり蕩けており、汗ばんだ首筋から鎖骨が扇情的で。

呆気に取られ、混乱を極める思考をよそに、素直な反応を示す肉体は、下肢に熱を集め、性感を刺激してくる。

「……は、っ……んんっ……」

「お前の可愛い三日月が飢えていてな。こうして愛でていたのだ」

合わせから忍ばされた手が三日月の胸元を弄れば、瞼を下ろし、唇を噛む彼の声が鼓膜にこびりつき、呼吸は荒いものへと変じる。

冷静さが残っていれば発狂していたに違いない。

しかし、三日月が自分以外の男に愛されるという倒錯的な欲を際立たせる場面を目の前に晒すれば、怒りも悲しみも霧散し、本能に忠実な好奇心だけが顔を覗かせる。

一歩、また一歩と距離を詰めれば、独特の匂いが鼻につき、三日月の性器が熟れているのだと気付く。

「……三日月」
「……はぁっ……あ、小狐っ……」
「私以外の男の愛撫は気持ちいいですか？」
「……、っ……ふ……」
三日月の前で膝を折り、汗に湿った髪を撫でてから顎を持ち上げれば、紺藍の瞳は生理的な涙と劣情に濡れている。
まだ決定的な愛撫を施されていないのか、こちらが嗜虐的な言葉を口にしただけで、露わになっている肩は大袈裟に跳ね、助けを求めるように腕を伸ばされて。
これに応えるようと上半身を抱き寄せ、唇を重ねれば、這わされた舌が輪郭をなぞり、舌先に吸い付かれる。
「……は、……んんッ……」
「オレのことは無視か？」
「三日月を優先して当然だろう？もし、お前が言ったように飢えているのであれば、満たすのが愛というもの」
「綺麗事を」
深くなる口付けを堪能し、上顎を舐めようとすれば、男の手が下降したのか、三日月は唇を離し、太腿を擦り合わせながら悶える。
その表情は行き過ぎた快楽を訴えており、宥めるように背を撫でれば、袖に滑った指先に力がこもり、熱を帯びた呼気を繰り返す。
優しい手つきを心掛け、三日月を挟んで男と言葉を交わせば、愉悦と狂気に染まった紅い瞳が細められていく。
男は抑圧し、沈めたはずの願望が具現化したものなのだろう。
このような形で対峙しなければならないことに危機感を覚えつつ、三日月に視線を戻せば、下肢に伸ばされた手が這い回っており、踊るように悶えて。
今にも零れ落ちてしまいそうな嬌声を堪えようと瞑られる瞼が健気であり、頬へと伝った涙を拭ってやれば、今、何をすべきかが明確になる。
「綺麗事だろうが構わん。私は私の好きなようにする」
「ほう。では、オレはオレで楽しませてもらおうじゃないか」
「……っ、あぁ……あ……」
男の手が無慈悲に袴を剥ぎ取り、三日月の下肢がさらされれば、腹についてしまいそうな硬度を持った性器が脈打ち、その表面は溢れ続ける先走りによって濡らされている。
直ぐそこまで迫っている絶頂に余裕を奪われているのだろう。
躊躇うことなく四つん這いとなり、大胆に腰を突き出した三日月は淫らに下半身をくねらせて。
つられて揺れる双丘の残像に息を呑み、再び口付けようとすれば、男の手が性器を捕えたのか、三日月は咄嗟に顔を背の方に向ける。
その瞬間、湧いてくる嫉妬にも似た苛立ち。
男の好きなようにさせてたまるかと、伸ばした右手で胸の突起を撫で、押し潰すように指先を動かせば、粘着質な水音と甲高い嬌声が部屋に響く。
「……ひ、……あっ……あぁ……」
「胸と下肢を弄られて気持ちいいですか？」
「恥ずかしい言葉にも反応しているぞ、三日月」
浴びせられる言葉を否定するように弱々しく頭を振るものの、従順に快楽を享受する三日月の姿に煽られ、左右の胸をじっくりと愛でれば、突起は摘まめる大きさに勃起する。
そのまま指の腹で窪みをなぞり、強弱をつけて指先を動かせば、陸に打ち揚げられた魚のように全身を跳ねさせ、力の抜けた上半身は、とうとう沈んでいく。
このまま愛でれば、不意の怪我を負いかねない。
愛撫を一旦、止め、両脇を支えてから肘をつかせれば、燃えてしまいそうな体温が肌に転移し、この行為が齎している負担の大きさ

を窺わせる。
しかし、今更、止めるという選択肢は存在しない。
せめて呼吸だけでも楽にしてやりたいと、胡坐をかいた太腿に頭を置き、汗ばんだ肌にはり着いた髪を梳いてやれば、息も絶え絶えに喘いでいた彼の視線がこちらと捉え、静かに微笑む。
その顔を確認すれば、唇の端から伝った唾液は顎に到達しており、紺藍の瞳は妖しい光を放つばかりで。
今は存分に感じさせ、渦巻く熱を解放してやるべきだと身勝手な解釈をし、性感帯の一つである耳を右手で遊び、左手を腰へと伸ばせば、男の手の動きが性急なものへと変じたのか、褥へと下りていた三日月の指先が敷布を掴む。
「……あ、っあ、あぁぁ……」
心待ちにしていた絶対的な快感に貫かれ、彼の美しい背が大きく反れれば、男は満足そうな笑みを浮かべる。
一度では満足できなかったのか、余韻に浸り、全身を震わせる光景に喉が鳴れば、下肢から離れ、持ち上げられた手。
たっぷりの白濁をまとった指先を口元に運び、舌を這わす男の行動は気に食わないが、甘い声を共に呼吸を整える三日月の姿を見れば、心は満たされていく。
できれば、彼を感じさせることだけに集中したい。
これがせめてもの罪滅ぼしになるだろうと、新たに零れた生理的な涙を拭い、自制しようと努める。
しかし、彼の吐き出す呼気が股間を直撃し、心と裏腹、意識してしまった男根が容赦なく下着を押し上げれば、己の欲求のみを追い求めたい衝動に駆られて。
意思の弱さに眉を顰め、やり場のない怒りをどうすべきかと考えれば、時宜を図っていた男が口を開く。
「のお、三日月。小狐の雄を愛でてやれ」
「……っ、何を言い出す」
「お前も望んでいるのだろう？熱く滾っているではないか」
何もかも見透かしていると言わんばかりの厭らしい雰囲気を醸し出す男の言葉を打ち消したいのだが、ゆっくりと動き出した三日月によって裾が乱され、隆起した欲の塊を凝視されれば、それどころではなくなってしまう。
今、彼の箍は完全に外れているのだろう。
恍惚を帯びた眼差しを注がれ、形を確かめるような手つきで撫でられれば、感覚ばかりが鋭くなって。
褥に手をつき、動き出してしまいそうな腰を宥めることに集中すれば「小狐」と、蕩けた声で名を呼ばれ、下着の上から口付けを落とされる。
布越しではあるが、唇で食まれ、舌で舐められ、蠢くような指に愛されれば、ひとたまりもない。
手元に残しておいたはずの自制が霧散し、直接、触れられたいという願望ばかりに気を取られれば、これを察したのか、三日月は下着に手をかけ、欲の塊を取り出す。
「……う、三日月」
「……はぁ、あ……熱い……っ……んん……」
凶器になりかねない大きさに育った男根の根元を撫で、愛しさを込めて頬擦りをされれば、背に戦慄く恐怖と甘美な誘惑。
現実世界に居る彼と比べものにならない積極性に戸惑いと恐れを感じずにはいられないが、秘めていた願望が果たされ、求めているのだと行動で示されれば、この先を望まずにはいられない。
三日月の一挙一動が強力な催淫効果を生み出し、酔わされているのだと頭の片隅で考えつつ、制止する術を失えば、瞼を下ろした彼は大きく口を開き、幹の半分を一気に咥え込む。
「くくっ。もっと善くしてやれ」

「……は、っ……」
こちらの様子を観察し続ける男の手によって、持ち上がったままの三日月の双丘が開かれれば、慎ましい蕾に宛がわれた人差し指が易々と呑み込まれていく。
その瞬間、三日月の動きが止まり、顔の位置が変われば、男根の先端に触れる頬の内にある柔らかな粘膜。
くぐもる嬌声も相まって、堪えようのない快感が全身を駆け巡れば、とうとう腰は揺れだし、燃えるような熱が獰猛さを煽ってくる。
「……う、んんッ……」
「……っ……三日月……」
爆発的な勢いを持つ衝動に身を任せ、抽挿と同じ腰つきで咥内を犯せば、三日月は顔を歪め、苦しそうに呻く。
だが、男根を放そうとはせず、口は窄められて。
このまま白濁を吐き出し、汚してしまいたいと、頭を掴もうとすれば、後孔を弄ぶ男が三日月の背に覆い被さり、遮るようにこちらの顔を覗き込んでくる。
「上の口でいいのか？下の口の方が気持ちいいだろうに」
「……は、っ……」
「最初はお前に譲ってやる。その方が三日月も喜ぶからな」
一体、男が何を考え、このような提案をしてくるのか解らない。
しかし、内壁を穿ち、欲の全てを叩きつける感覚を味わいたいという思いが勝れば、腰の動きは緩やかなものへと変じ、あんなにも魅力的だと感じていた咥内への興味は薄れ、男根を口外へと引きずり出すことができる。
「……あ、……は、あ……あぁ……」
「三日月、小狐の方に尻を向けてやれ。愛でた雄で存分に乱されたいのだろう？」
口元を先走りと唾液で濡らし、荒い呼気を繰り返す三日月に対し、男は耳を食みながら、甘い囁きを注ぐ。
まるで術にかけられたように素直に頷き、感じ入った声を彼が奏でれば、焦らす手つきで抜かれる後孔を弄んでいた指。
項に口付けた男が離れるのを待ち、力の入らない四肢で身体を支えた三日月は、ゆっくりと身体の向きを変え、褥に上半身を預ける。
横に向けた顔から蕩けきった視線を送り、双丘を高く持ち上げる姿は、淫靡としか言いようがない。
獲物を捕らえ、仕留める時に感じる高揚を覚え、邪魔となった小袖と下着を脱ぎ捨ててから、男根を宛がえば、目の前にある蕾は収縮し、早くとせがんでいるようで。
最奥まで一気に貫いてしまいたい獰猛さを何とか抑え込み、腰を進めれば、ほぐされた秘肉が絡みつき、それだけの刺激で達してしまいそうになる。
「……ぐっ、あ……はっ……」
「……あぁ、あ……」
一度、動きを止め、両側から腰を掴んでから内壁を抉じ開ければ、三日月は背を反らし、惜しげもなく喘ぎを零す。
繰り返す抽挿の中、下肢から広がる快楽に眩暈にも似た感覚を覚えれば、限界に達しているはずの欲の塊は更に硬くなり、短い間隔で脈打つ。
「気持ちよさそうだな」
「……ん、んんっ……」
「オレの雄も愛してくれるんだろう？」
徐々に激しくなる行為の合間、下肢を寛がせ、腹につきそうなほど直立した陰茎の根元を持ち三日月の口元に近づけた男は、髪を梳き、その先を促す。
これに応えるように肘を付き、男の股間に顔を埋めた三日月は、喜びを表現するように腰をくねらせ、最奥まで男根を呑み込む。

上の口と下の口から欲の塊に愛され、全身を使って快楽を享受する貪欲さ。

肌と肌がぶつかる音が鳴る腰つきで、はち切れんばかりの欲を捩じ込み、留守になっている性器に手を伸ばせば、新たに溢れる先走りが指に絡みつき、絶頂を迎える寸前まで硬度は増していく。

「……は、三日月はこのように愛されるのが望みであったか」

「……っ……ん、うっ……」

「否定なさっても締め付けは強くなるばかりですよ」

弱々しく頭を振り、くぐもる声で反論しようとしているが、目の前にある陰茎も、締め付けている男根も決して放そうとしないのだから、全く説得力はない。

ならば、快楽でねじ伏せようと男根を後孔の入口近くまで退き戻し、腰のばねを使って貫けば、内壁は全てを吸い尽くすように蠢く。

「……、っ……ふ、んん……」

「……はっ、出しますよ」

そろそろ求めていた絶対的な快感を味わおうと、腰つきに連動させ、熟れた性器を扱けば、口淫を施されている男と目が合う。

欲に忠誠を誓う紅い瞳を細め、見透かす笑みを浮かべる顔は何とも憎たらしい。

しかし、男が居なければ、決して味わうことができなかった世界が、ここにあることは間違いなくて。

もう少しだけ淫らな夢に身を委ねようと心に決め、舌なめずりをすれば、意識は淫らな願望に塗りつぶされていき、これまでの観念が崩壊する快感だけが体中を駆け巡った。

終

さあ、これは一度限りの夢。乱れた姿を見せてくだされ
花色衣